

数通流茂遠志(2) : 先達の通信教育

中野, 三敏

<https://doi.org/10.15017/4742016>

出版情報 : 雅俗. 12, pp.162-168, 2013-07-12. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



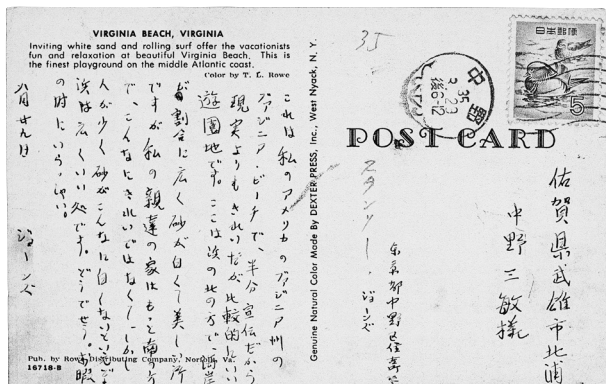
数通流茂遠志 (二)

— 先達の通信教育 —

中野 三敏

昭和35年度

(九) スタンリー・H・ジョーンズ君 八月廿九日 絵葉書



これは私のアメリカのバージニア州のバージニア・ビーチで、半分宣伝だから現実よりもきれいだ、比較的いい遊園地です。ここは浜の北の方で、海岸が割合に広く砂が白くて美しい所ですが私の親達の家はもっと南の方で、こんなにきれいでなくて、しかし人が少く砂がこんなに白くないといえども浜は広いいい処です。どうでせう。

八月廿九日 ジョーンズ

※ これは私がまだ大学院生だった頃、暉峻研究室に来ていた、コロンビア大出身のスタンリー・H・ジョーンズ君の絵葉書である。ジョーンズ君は平賀源内研究を志していた人で、同時にレオン・ゾルブラッド君（馬琴研究で著書もあり、日本人の奥さんがいたが、レオン君は大分前に亡くなった）などもいて、私は今でいうT・Aの様な事をアルバイト代りにやっていた。ジョーンズ氏は中国人の奥さんと、東中野のアパートに住み、武雄の家にも来て貰うなど随分親しくつきあった人物である。当時は暉峻先生が源内の権威で、その所縁だったが、大変な勉強家で、家には数十のカード・ボックスがあり、何でもカードにしていた。恥かしい事だが、語彙カードや事例カードを取るなどということは、ここで初めて目にして感心した覚えがあります。

有名な源内の仕官御構い事件に関して、高松市史か何かで「仕官不御構被遊」とあるのを目敏く見つけて、散々議論したことを覚えている。「不」一字の問題だが、生涯に関わることにだけに、一字の有無は大問題であり、結局、その源になった資料が今は見つからず、態々「御構遊はされず」と書くかなア、というようなことになって結局ミス・プリントだろうというような所に落着いた。無論暉峻先生にも報告し

た。然し未だにこの「不」の一字は未だに喉にひっかかっている。

ジョーンズ君はその後アメリカへ帰り、どこかの大学にいた筈だが僕よりは十歳ほど上だったからもう亡くなったかもしれない。当時の米留學生は、帰れば日本文学全般の先生になったようで、さすれば他の時代へ移ったかもしれない、現在は近世ではその名前は殆んど聞かなくなった。

源内は外国人も随分興味を持つ人が多かったようで、その数年ほど後には、フランス人のユベール・マエス君という人が来て、そのT・Aもやった。すばらしく頭の良い人だったが、これも恋愛問題のもつれで自殺したと聞いた。一緒に鳴子温泉へ行き、鬼首の間歇泉を見に行つて雨に降られ、一寸した鏡花ばりの出来事があったのを今も鮮烈に覚えている。

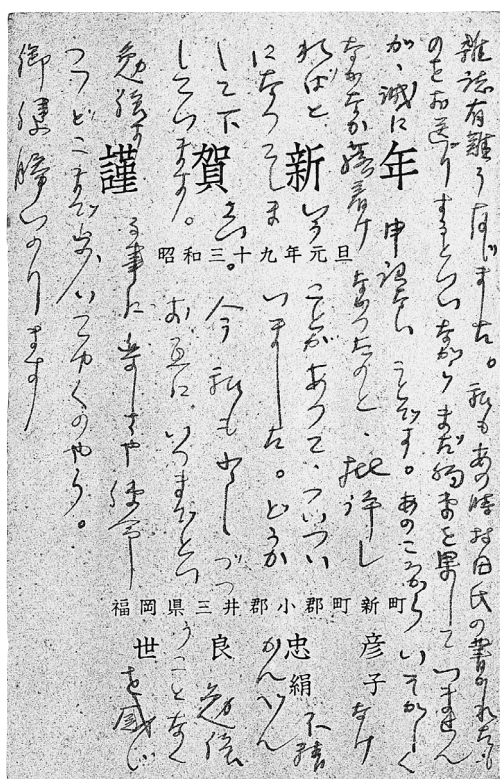
昭和39年度

(十) 世良忠彦先生 正月元日 年賀状

雑誌有難う存じました。私もあの時村田氏の書かれたものをお送りするといいながらまだ約束を果していませんが、誠に申し訳ないことです。あのころからいそがしくなかなか落着けなかったのと、批評しなければということがあつて、ついつい不精になつてしまいました。どうかかんべんして下さい。今私も少しづつ勉強しています。お互に、いつまでということなく勉強する事に楽しさや使命を感じつつどこまで歩いてゆくのやら。

御健勝いのります

昭和三十九年元旦



※ これは私の附設高校時代の国語の恩師で、東大の国文出身で古文を習った。

「雑誌」云々は多分「国文学研究」の「文運東漸の一側面」か何かを送った時のことかと思うが、「村田氏」は京都の村田穆氏のことである。先生の一押ししの近世研究者だった。理論家で、その頃はその西鶴の論評になかなかついて行けず、世良先生との間で二、三度やりとりしたと思うが詳細は忘れた。随分真面目な先生で僕のふやけた論文も一一批評して下さい。

後で校長になられ、国語教師に誰か推薦しろと言われて、長野君

(近代) や、古田君 (国語学) を推薦したが、附設在職中に亡くなられた。今もなつかしい先生である。

昭和40年度

(十一) 山川隆平氏 三月五日 葉書

揮毫、之品、吾輩、揮毫、洋、ヤ、子、繪
 予、し、事、鳴、呼、一、海、和、即、一、は、古、陰、予、車
 已、法、路、路、三、目、中、標、即、而、大、屏
 卿、ま、し、信、高、之、新、書、家、改、幸、田、成、左
 博、一、大、段、中、中、強、信、多、家、非、常、の、力
 廿、五、日、予、不、得、不、早、在、京、中、也、等

※ 山川氏は大阪の人。但し、当時は東京在住。破礼句尽しの「手毬唄」の注釈に心血をそそがれた人である。鶴屋八幡の御曹子で艷本研究に有名な今中宏氏の「大江戸文庫」に確かその考証が収められていたと思う。その板本の「手毬唄国字解」には初印と後印補訂本の二種あって、その異同を御報告した折の礼状だったと思うが、独特の癖字に頗る難渋、未だに読めぬ。

その内の一本に浜和助の蔵書印があり、頗る珍書持ちで通つた人の様なので、その素姓を確かめるべく御便りした御返辞の一通。

(十二) 広田二郎翁 十一月十九日 封書

擇復

お相々にお月ばかりだと、念馳致しておりましたところ
先日の学会で充實した南渡表を拜読し、南面識を得ようと
かた月ずつと非常によく研読しております。

甲斐守は意を決するに、秘稿「大変立派な書」を作と威致致
しめた。秘稿本の発想、主題の基盤に「近世中期」にある
老莊思想の流行のあらうところに注目され、これに「巨視的を方法
で採究して、ふくむる」展覧会を掲げておられますね。この
アルバイトの上に立ち、先日の内閣長をなされた訣で、思ひ合
わけてこそ御仕事、ううと、今後の内閣力を期待申上り、くち
ります。

免の方に、只今、また、我々の宗係についての論考を校の中
 に、す、また、晩年（心傷から、甚保初年まで）のおおむね、佛道
 論について考へたもので、す、このあと、最晩年の時期について、この
 論考は、次の機会に、紙張の都合から、発表を、延期するものと、決

かねてからお目にかゝりたいと念願致しておりましたところ、先日
の学会で充実した御発表を拝聴し、御面識を得ることができて
非常にうれしく存じます。早速御送惠頂きました玉稿、大変立派な
御労作と感銘致しました。(以下六行略)

私の方は只今支考と莊子の關係についての論考を校正中です。支考晩年（正徳から享保初年まで）の莊子觀・俳諧論について考えたものですが、このあと最晩年の時期についての論考は次の機会に、紙幅の都合から、発表を延期することに致しました。大体支考の活動の終ったところから貴方の御研究の時代が始まるわけで、その辺のことで考え合わせるべき問題も出てこようかとも思われます。どうかこれからもよろしくお願い申し上げます。なお、拙稿のでき上るのは来年一月頃かと思われますが、その折には早速御送り申し上げたいと予定致しております。まずはとりあえず御礼まで　草々

広田二郎

※「国文学研究」31号所収「談義本研究一、——近世中期に於ける老莊思想流行の実体——」を御送りした時の礼状。

広田氏は蕉門の漢籍受用に的を絞ったアブローチで、その方面を領導された。露伴の七部集注釈などにヒントを得られたかと思うが、一方、この頃から芭蕉崇拜の行き過ぎも何となく反省される傾向も見え、近年はその葉が利き過ぎたのか、芭蕉の学力如何が論じられるまでになった。極端な崇拜が丁度良い処まで戻ってきたような案配だが、無学とは言え、現代の我々風情と比べれば、当時の文人の漢籍理

解は余程行き届いていようから、丁度良い処という評言が芭蕉神格化に比して丁度良い処でもあろうか。その後、自堕落先生と支考の関わりなどについても種々御尋ねしたいことはあつたのだが、亡くなられてその機会は持てなかつた。

(十三) 丸山季夫翁 七月十八日 葉書

相續苦痛と山岡俊明付略相受の苦の
 明のこゝに讀み前の昔の文と前期戲
 作と共にけい造の所文のこゝの所文に
 甚難と云う所共大つてゆゑと云う原の所
 中と云う一節は此の合の記と云うと云う
 たも代々流のいふ所の所、戯作の所
 て、さういふ所、即ちさういふ所、是と云う
 である、と云う、さういふ所、さういふ所、
 である、と云う、さういふ所、さういふ所、

拝復、芳翰と山岡浚明伝略拝受御苦心の明阿の年譜此以前の貴稿文
 人と前期戯作と共に此は浚明研究のこれからの研究に基盤となり私

共大いに助かります厚く御礼申上ます最近扇合の記事を少々まとめました年代考証には御示教の歌戯帖を使わせていた、きました印刷になりましたら見ていた、き度いと存します九月頃出るかと存します先はとりあへず御礼まで 勿、敬具

※ 丸山翁は長崎幕末の政治家丸山作樂の御子息で、この頃は静嘉堂文庫の主事をなさっていた。世田谷郊外の静嘉堂文庫を家内ともども御案内戴き、玄関の皮張りの椅子に腰迄はまってもがいた揚句、インド式の岩崎廟をめぐって、御宅迄訪れ御馳走に預ったことは、今に忘れ得ない。

九州出身でしかも早稲田の大先輩でもあり、三古会や掃苔会に御みちびき戴き、森翁や木村嘉次老（筆意彫りの名人木村嘉平の裔）、池田文痴菴、谷沢氏（松浦武四郎など蝦夷研究の先達）などなど、随分多くの方々に御引き合わせ戴いた。文人伝のイロハを御示教戴き、江戸の文人の見識と人格こそ、近代の我々が最も遠い存在に成り果てた、その事に気づかせて戴いた最大の恩人である。山岡明阿研究の先達として京橋図書館の安藤菊二翁の御紹介に預り、浚明伝の骨格迄教えて戴いた。扇合会は出席者加茂季鷹の縁で、後年盛田帝子君にその伝の完成を薦め、その活躍で京在住の御子孫に巡り会い、その蔵書の凡てを一時九大へ寄托して戴き、その中に季鷹の逸書「都の手ぶり」の原稿を見つける事も出来た。

「歌戯帖」は先号に掲出した浜田先生の御指教で、安永六年、牛山に密命を受けた平秩東作の蝦夷行記で、途中壺の碑を見に立寄った東作が、その格子に浚明の落書きを見つけて懐旧の涙を流し、江戸へ帰っ

たら南畝や橘洲にも是非この事実を伝えようと書き記したもので、その後更に、富田伊之の「奥州紀行」（南部叢書・第六所収）はこの時の浚明の同行記で、浚明の歌も数首入っている旨を天理の中村忠行氏に教えられるなど、とに角文人伝には諸家の示教を仰ぐことが如何に大切かを十分に教えられたこと、今に忘れられぬ。

（十四） 山下一海氏 十一月十三日 葉書

先日のお葉書いただきながら失礼しています。
蓼太句集二種 中村博保君より受取りました。有難く拝借拝見して
います。仔細に比較すると、いろいろと興味深いもので、ちようど

校正中の古典俳句大系にも参照させてもらっていますが、ちゃんとした形では、いずれ貴兄が、どこかに発表紹介されるべきかと思えます。俊定先生も大変興味を持っておられますので、小生の校正が一段落しましたら、俊定先生にゆっくりにかけたいと思います。先日一応研究室でかなりくわしく御覧いただきました。長くありませんがもう少しばらく貸しておいて下さい。ほんとうにどうもありがとうございます。近世文学会でお目にか、れるとも思いますが、お礼まで……

※ 山下さんは博多の人。中村俊定研究室の先輩で俳諧研究と評論の先達だが、つい先年亡くなられた。白石さんや田中さん森川さんとも同年だったように思う。今、その論文集全十巻の第一巻が手元に届いたばかりである。推薦文も書かせて貰った。

九州出身という事もあって、研究室でも特に目をかけて貰った。文学座の神山繁という洪好み役者に良く似た、額の広い良か男であった。暉峻研究室での私の同輩で、日本女子大から来られた登起子さんと結婚されたが、登起子さんが先に亡くなられた。

当時は俳諧研究といえば芭蕉中心となるのはやむを得なかったろうが、実際は蕪村や蓼太の様な天明ぶりが御好きなように見えた。蓼太句集もその縁だったろうか。その初編は安永六年板といわれていたが、実は明和六年が初板であり、南畝の序が安永の再板にあって、句数もまるで違っていた。何しろ俳書通の中村俊定先生に允可を貰ったのだから、それ以来和本好きとして一寸は認められるようになったのだが、実は何の事はなく、たまたまのぞいた赤門前の木内書店に二つ

並べて置いてあったのを買って来ただけだったのである。
丁度その頃の木内書店の請求書が出て来た。こんなに安かったのかと我ながら驚くほどなので、次に掲出してみる。

昭和44年度

(十五) 木内書店 四月十一日 請求書

御注文書籍只今同封見積書一通、請求書一通の通り普通便一個にて御送本申上げましたから御査収下さいます様御案内申上げます。

送料三〇〇円は絵入文庫に加算させて頂きましたから御了承下さいます様御多忙中とは存じますが何分よろしく御願ひ申上げます。
右御案内迄

四四年四月十一日

詩法要畧	二冊	四〇〇円
似雲法師としなみ草	一冊	三五〇円
故事雕龍	二冊	四〇〇円
皇朝字者 妙と奇談しりうごと	三冊	六五〇円
聖学自在	三冊	四〇〇円
擊壤歌集	一冊	六五〇円
蜚雪餘話	三冊	一〇〇円
明四先生文範	四冊	二〇〇円
豊子筆談	一冊	四〇〇円

經史論苑	一冊	二五〇円
辨道考註	一冊	八五〇円
俳諧天狗つゑ	一冊	八五〇円
佐須奈辺	一冊	八五〇円
蘊古斎磐谷紀行	一冊	八五〇円
三山風雅集 下卷	一冊	四〇〇円
絵入文庫	二三冊	五、三〇〇円

¥一二、七〇〇円

※ ほとんどが八〇〇円台迄、小倉の香月牛山の「螢雪餘話」に至っては一〇〇円というから、今時の値段と比べて殆んど三分の一。何という良い時代に生きていたことか。

昭和四十一年からは名古屋にいたが、松本書店や藤園堂や飯島書店は物によつては尚この半分位の値段であつた。その辺りは先著「本道楽」にしっかり書いているので割愛。

それでも本郷の赤門の真ん前に在った木内書店で当時の東大生らしき学生さんには会つたことも無かつた。和本を買うという行為は、その位世間からは隔絶した所業だったのであらう。

尤も、当時の国立大生は苦学生が殆んどだったからでもあらうか。此方は曲がりなりにも給料取り（名古屋の短大勤務）なのだから、その分割り引いてもよからう。